視覚生理的現象と 歯科技工

従来、単に「錯視」といえば、「形の錯視、幾何学的錯視」のことを指し、真っ直ぐの線が傾いたり、同じ大きさのモノが小さく(大きく)見えたりといった錯視は、古くから人々を魅了してきた。その錯視の研究は約150年という長い歴史があり、またここ10数年ほど、PCの普及に伴い次々と新しい錯視図形が発表され錯視研究は盛り上がりをみせている。
今回、様々な視覚特性の中の一例を紹介しながら、歯科技工への応用と提案をしたい。

Restration with CastDenture for Esthetic Dentistry

～視覚特性を考慮したフレームデザインと製作術式の提案～

光重合型歯冠用硬質レジン(ハイブリットレジン)は臼歯部対応修復材料としての理工学的特性を備えつつ、築盛作業性、研磨性、自費材料として使用する上で、豊富なエナメル色、特殊色等、さまざまな要素が求められ、昨今、インプラントの歯肉マテリアルとして需要が増え、使用方法の問い合わせを多く頂いております。
今回、視覚生理特性を考慮したCastDentureのフレームデザインを弊社、アルゴンキャスターAEとCDシステムを使用した製作術式の紹介、インプラント、デンチャーのGUMカラーリングと、そのために必要なフレーム構造とデザインも合わせて提案する。